

sola fide～聖書を道しるべとして～

奨励	山本 真司【やまもと・しんじ】
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校宗教センター主任

わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。

(ガラテヤの信徒への手紙 2章15—16節)

馬偕博士と新島襄

台湾で宣教師として働く友人を訪ねてきました。働きの中心である国際日語教会天母会堂は閑静な住宅街にあるマンションの一室、そこには、台湾の方々はもとより、台湾に長く滞在している日本人、日本語を学びながら求道している方々が集っておられます。もう一つの拠点は台北YMCAの日本語教室、多くの老若男女がグレード別に熱心に日本語を学んでおられます。若い人と話していると、「おばあさん、おじいさん、そのおとうさんやおかあさんはクールです。格好良いです」と言うので、どうしてかと問いかけますと、「日本語が上手だから」と答えました。アニメや映画を筆頭に日本語や日本文化への興味は尽きない。その中で、すぐに日本語を普通話や台湾語に翻訳してくれる高齢の方々はクールなのだというのです。キリスト教会が経営している有料老人ホームを訪ねて、そのクールさの謎が解けました。ちょうど、日本語の歌を歌う会があったので、参加しました。教会立ですから賛美歌は当然ですが、かつての文部省唱歌や懐メロを気持ちよさそうに歌われます。

1895年から50年間、台湾を日本が統治して、初等・中等教育で日本語教育を施しましたので、高齢の方々には綺麗な日本語を話されます。日本語を使う人たちという意味の「日本語族」と呼ばれる高齢のクリスチャンのために、日本語で礼拝を守る教会で友人は働いています。友人の案内で、淡水にある台湾基督長老教会に属する淡水教会と真理大学（アレティア大学）を見学に行きました。そこで、馬偕博士（台湾語：Má-kai 1844年3月21日～1901年6月2日 スコットランド系カナダ人宣教師、医者、教育者、本名George Leslie Mackay）と親しまれている宣教師の働きを知ることができました。マッケイ宣教師（馬偕博士）は1871年にカナダ長老派教会ミッションとして台湾へ移住し、淡水鎮を中心に医療伝道（キリスト教を医療を通して広める宣教方法）を展開します。ですから、淡水教会には最初の診療所が博物館として残っており、医療器具、リードオルガンなどが保管されています。馬偕博士は1880年まで多くの教会を設立し、医療宣教師ジェームズ・マックスウェル師と共に、台湾基督長老教会を生み出します。また、馬偕病院や牛津學堂（Tamsui Oxford College、現在の真理大学）という学校を創設し、2年後の1884年には女性教育のための「女學堂」を創設して、台湾の女子教育のさきがけとなりました。

馬偕博士の働きを俯瞰して、その時期と仕事が、われらが新島襄と似ていませんか。襄よりも少し長生きでしたが、最後は「教壇にすら立てなくなったことで自身の最後が迫っていることを悟った彼は、交替で彼の介護をしていた家人と学生の目を盗んで学校のチャイムを鳴らし、生徒を呼び集めると力を振りしぼって最後の授業を行った」と言われています。生徒のため、信徒のために人生をかけたことも新島襄そっくりです。そこで、同志社創立を記念する礼拝でご紹介したいと考えたのです。なぜ、この人たちはご自分の人生を他人のためにささげること志したのか、それをどのように周囲の人たちは受け入れたのか、考えてみたいと思います。

同志社と宗教改革

さて、読んでいただいた聖書の箇所は実は、宗教改革にまつわるものです。同志社の創立と宗教改革を結び付けて、創立の意味を味わいたいと思います。

「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです」。

律法は聖書の信仰にとって大切な要素です。神と人との約束を果たすための原則と言ってもよいでしょう。ただ、それは目的ではないと説くのです。律法を守り、実行することは必要条件ではありますが、十分条件ではないです。イエスが救い主であることを信じ、イエスの示す信仰にならって生きること、それが義とされる、正しい生き方だということです。

ところで、今年は宗教改革500周年、日本ではそれほど騒がれませんが、ドイツでは事情が異なります。1517年10月31日、現在のドイツ連邦共和国ザクセン＝アンハルト州の大学町ヴィッテンバルクにある城教会Schloßkircheの扉にマルティン・ルターというアウグスティノ修道会に身を置いていた神学教授が小さな紙片を打ち付けておりました。「Disputatio pro declaratione virtutis indulgentiarum 95 Theses 31 octobris 1517」（贖宥の効力を明らかにするための95項目にわたる討論提題）「95か条の提題」として知られているものです。贖宥状の販売が信仰と照らして不当であることを論拠として、当時のローマ・カトリック教会のあり方を問うた内容となっております。おそらくこの中で最も有名な箇所は、「硬貨が献金箱の中へ投げ入れられて、チャリンと鳴るやいなや、魂は煉獄から飛び出すという人たちは、人間の教えを説いている」（27）。「献金箱の中へ投げ入れられて、チャリンと鳴る硬貨で、利益と強欲が大きくなることは確かである。ところが、教会の大願の祈りが成就するかどうかは神のご意思による」（28）。

マルティン・ルターは愛と信仰の熱意に燃えていた使徒言行録に表されているような教会への復興を望んでいたのです。詩篇講解を中心に真理を明らかにするために公開で討論したいという意図でした。ちなみにルター・シュタット（ルターの町と名付けられている町）は、彼が生まれ育ったアイスレーベンです。今年は宗教改革500周年、ルターゆかりの37都市、例えば、アイゼナハ（10代の3年間を過ごした町）、シュマルカルデン（説教をした聖ゲオルグ教会がある町）、コーブルク（追放中メランヒトンと文通した町）や、ヴァルトブルク（悪魔にインク壺を投げたと言われる城、新約聖書をドイツ語に翻訳した場所）などの町々ではさまざまな企画が実施されております。

それから数年後、事態はルターの予期しない形で展開してまいります。1521年ヴォルムスで開催された帝国議会に皇帝カール5世によって召喚されたルターは、ローマ・カトリック教会と立場を異にする主張を撤回するように求められました。そこで彼は「聖書に書かれていないことを認めることはできません。私はここに（聖書に）立っているからです。神よ、助けてください」と答えたということです。ここから私たちが属する本来の意味での福音主義教会が始められ、アウグスブルク信仰告白が形作られ、ローマ・カトリック教会と袂を分かつことになってまいります。

さて、先ほどご紹介いたしましたように、マルティン・ルターは、「Hier stehe ich」私はここに立つ、と聖書を示したと語り継がれております。同志社創立を思う時、私たちは、これまでどこに立ってきたのか、今どこに立っているのか、これからどこに立つべきなのか思いを巡らせてみたいのです。

ご紹介したマッケイ宣教師、宗教改革の立役者マルティン・ルター、そして私たちの新島襄、だれもが計り知ることのできない見えない力で招かれ、それぞれの感性で向き合うこと、大切さを分かち合うために人生を掛けたのだと思います。定められている規則や方法に縛られない豊かな人生を、神は人の信仰を土台とした生き方を通してお示しになります。同志社は、私たちに自由な学びと感性を育む場所として備えられました。創立記念日を覚えて、新島襄から続く伝統、殻を破って、いつも新しい自分に出会っていく、豊かな隣人との出会いに気づきかけにしたいものだと思います。